

市政ニュース

新庁舎での業務開始は平成25年春 豊岡市新庁舎建設工事安全祈願祭挙行

4月20日、市役所本庁舎前で、「豊岡市新庁舎建設工事安全祈願祭」が施工業者の主催で行われました。

神事では、中貝市長、豊岡市議会議員、関係区長、市民

検討委員会委員、関係業者などの67人が参列し、工事の安全を祈願しました。

中貝市長は、関係者に感謝の意を述べるとともに、「何があっても、市民の大切な日常を支え、市民の希望をリードする拠点となる市庁舎の起工ができたことをうれしく思い



▲「すき入れ」をする中貝市長

ます。事故なく、新庁舎が完成することを願っています」とあいさつしました。

新庁舎は、平成25年3月に完成する予定です。

市議会の同意を得て任命(選任)された委員 (敬称略)

【教育委員会委員】

(任期4年)



▲深田 勇

【固定資産評価審査委員会委員】

(任期3年)



▲重次勝介



▲文垣 基



▲坂岡早苗

観光客と地域住民とのふれあい空間づくり 城崎駅通り公園竣工式を開催

4月18日、観光客と地域住民との交流を深めるための「城崎駅通り公園」(城崎町湯島)が完成し、竣工式を行いました。

公園には、イベント広場、遊具広場などが整備され、子育てに優しい設備(授乳室、キッズトイレ、子ども用洗面台など)も充実しています。

同協議会の皆さんが餅を配って完成を祝いました。

公園の管理は一部を除き、関係地域の「城崎駅通り公園連絡協議会」に委託するため、中貝市長から同会会長の上崎

敏男さんへ園内の休憩所の鍵が渡されました。

宮津線を支えた80年の歴史に感謝 「旧円山川橋梁」記念モニュメントを設置

円山川に架かる北近畿タンゴ鉄道宮津線「円山川橋梁」は、平成22年4月に架け替えられました。その前の「旧円山川橋梁」は昭和4年に架けられ、80年間、国鉄からJR、KTRの宮津線を支えてきました。

長年、風雨に耐え、親しま

れてきた「旧円山川橋梁」の往時をしのぶとともに歴史的偉業を後世に伝えるため、同橋梁の橋脚に使用されていた石材やレールを活用したモニュメントを、KTRコウノトリの郷駅(但馬三江駅・日撫)に設置しました。

主な市政の動き

【4月】

18日・総合健康ゾーン診療所開設(ウエルストーク豊岡内)

19日・城崎駅通り公園竣工式

20日・被災地へ緊急消防援助隊出発

21日・市庁舎建設工事安全祈願祭

22日・旧円山川橋梁記念モニュメント設置(KTRコウノトリの郷駅)

28日・被災地支援隊出発(27日・5月6・9・13日)

29日・日本赤十字社へ義援金送金

【5月】

6日・全国シニアソフトボール豊岡大会(9日)

12日・兵庫県立大学と豊岡市との連携協力に関する協定調印式



▲祝城崎駅通り公園完成

植村直己の精神を伝える

「2011日本冒険フォーラム」開催

5月15日、全国のチャレンジャーおよび植村ファンが一堂に集う「2011日本冒険フォーラム」冒険の伝説・未来」を明治大学のアカデミーホールで開催しました。約1千人が参加し、日本がもつと冒険スピリット溢れる国になってほしいと感じた1日となりました。

また、「東日本大震災」後の開催となったことから、この試練の時期に立ち上がりつつある東北各地の方々、その復興を支える日本の全ての方々

への応援となるよう、テーマに「挑戦」を加えました。さらに豊岡市内の子どもたちが復興の願いを込めて折り紙で折ったコウノトリとひまわりの種を参加者の皆さんへ渡し、会場全体で復興の願いを共有する時間にもなりました。

会の最後には、植村直己さんにあこがれ、活動を続けている山崎哲秀さん(犬ぞり極地探検家)から冒険の思いが発表されるとともに、中貝市長から会場の皆さんへ「4年後にもう一度お会いしましょう」の

メッセージも飛び出しました。このフォーラムの内容は、記録集にまとめられるとともに、植村直己冒険館の企画展で報告します。



▲命と向き合う冒険も日常と話すパネリストの皆さん

豊岡の魅力でおもてなし！スポーツ大会で大交流を実現す

第29回全国シニアソフトボール豊岡大会開催

5月6日から9日までの4日間、全国シニアソフトボール豊岡大会が、県立但馬ドームや名色総合グラウンドなどで開催されました。

この大会には、満59歳以上の方で構成した60チーム・1348人が参加し、熱戦が展開されました。本戦と1試合目に敗退した

チームによる親善大会が行われ、どのチームも最低2回は試合ができるように工夫されています。また、シニア世代の全力プレーは大きな感動を与えました。

地元では、競技関係団体による大会運営協力のほか、神鍋観光協会が主体となって、会場設営協力や餅の振る舞いなど

でもてなし、大会参加者や応援の方々を温かく迎えました。



▲熱い4日間の1場面

中貝市長の徒然日記 ④

言葉を失う

スランプです。徒然の原稿を書くべくパソコンの前に座ったまま、言葉が全く出てこないのです。

動物園のおりの中のクマのように、家の中を首を振りながらうろついて、帰省中の娘に「うー、スランプだあ」とう

なり、廊下ですれ違う妻に「うー、一言も出てこん」とわめき、机に座ってはため息をつくこと2時間余り。

娘からは「いつそのこと、うー、スランプだあ」というタイトルにしたら？」と言われる始末です。

書く材料がないわけではないのです、普段であれば「普段」というのは、あの震災・津波が起きていない「普段」のことです。

人々の生存を脅かし、社会を根底から覆すような事態が発生すると、底の浅い言葉や議論、政策はあつという間に色あせ、輝きを失ってしまいます。平時であれば、おかしな意見であっても「ま、いろ

いな意見がありうるね」と言えなくもないのですが、大震災のような圧倒的な脅威の前にすると、何が大切なのか、一瞬にして明らかになつてしまうからです。今、国の政治家たちに厳しい視線が向けられている理由は、それで

他方、被災地の首長たちの言葉の確かさ。彼らは豪華なホールや大豪邸を作りたいわけではありません。人々の失われたごく普通の暮らしを一刻も早く取り戻したいだけです。言葉は重い現実と強い責任感に根差しています。

何よりもまず、命。従って、安全。食料、水、住居、布団、道路、学校、職場等々；そして希望。首長たちが直面している、再建しなければならぬものの果てしないリスト。

筆が進まない背



普段の生活が一番